



歌道之事

人々内談和歌并雜々

特別
^ 2
4867
44



歌道之事

人々内訣和歌
花雜々

三頁

千香歌位

海心翁

宋梅

若春翁

春月

松竹翁

一書

左

予れ方りしむるも山田に梅の匂ひにこそしるべき

右

人とははらばれ梅の匂ひこそしるべき

左 か 勝 若 春 翁 梅 竹 松 竹 翁

二書

左

ゆくまげらるる梅の匂ひこそしるべき

右

せりてふは梅の匂ひこそしるべき



十

た

おつらうとせしむるはなつらうもやあつらふことなむ

ぬ

し

た

たぬ

し

夕顔 六月五日

若かりしもよくなり夕顔の花のつゆのあはれさきり
有つて詠とて花のあをいもよく

赤玉の玉の情も如ときそ芝すしき夕顔ののち
一二首のりかう障子を捲きたる乃ち紙ト書し用名多クあしこ他吟底ノ方ハ新
其方信子尼山用様ニテ白玉ニ執筆シ夢を歌詠ニ白玉即チ赤ト云ふ也
あつらふ事ハ即チ玉ト云ふ上ノ詞ナクセ玉也

蟬

住りけの松を以てかみかみしてひらひらつ蟬の音
よきなりしを安んじ

て五ノカノ波も一ツに打ト云カケ名たるへはひらノ蟬ニ云俗蟬近シ但名云ノ
趣キルへ何カ名

亦多ク空蟬ノ一ノ音遠へリ現文ニ然ラ一物ヨリ空蟬ノ一
ら又及たうつくしき蟬ト云モ用ル何カ名

現文 空蟬 為蟬ノ音
遠境ニ云モ毒

多しれて蟬と云ふは蟬の
トト

え蟬の音と云ふはさうさう雄山と云ふはあつたつた
蟬の音と云ふはさうさう雄山と云ふはあつたつた

蟬

京の山トトツクは雄山と云ふはあつたつた用
こるす例山のうすやを

早稲七葉草
月をなす例

五月の吹をけや
二つ吹をけや

三葉草

五月の吹をけや
五月の吹をけや

五月の吹をけや
五月の吹をけや

五月の吹をけや
五月の吹をけや

まふみちのつぼき 遠くの山に暮らす人へ
さしづ

まふのまをよまなく 心持のまよふまをよまらぬ
折傷の心はな

ゆきけり 雪のまをよまらぬ
ま

まをよまらぬまをよまらぬ 心持のまをよまらぬ
ま

扇風

秋風をよまらぬまをよまらぬ 心持のまをよまらぬ
ま

あふくや 扇よ 秋のまをよまらぬ 心持のまをよまらぬ
折のまをよまらぬ

あふくや 扇よ 秋のまをよまらぬ 心持のまをよまらぬ
折のまをよまらぬ

あふくや 扇よ 秋のまをよまらぬ 心持のまをよまらぬ
折のまをよまらぬ

あふくや 扇よ 秋のまをよまらぬ 心持のまをよまらぬ
折のまをよまらぬ
あふくや 扇よ 秋のまをよまらぬ 心持のまをよまらぬ
折のまをよまらぬ
あふくや 扇よ 秋のまをよまらぬ 心持のまをよまらぬ
折のまをよまらぬ

ふらふらやねむいし かねてのうらみはなほ しのびぬるらん

ふしうねもはなれそつし 我のこころは ちかみちなるらん

わら油のこころをよめりおとせしるらん せむしあふまらぬらん

あつと道すし ぬるるらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

ふらねまのちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

あつと道すし ぬるるらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

あつと道すし ぬるるらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

あつと道すし ぬるるらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

あつと道すし ぬるるらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

あつと道すし ぬるるらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

あつと道すし ぬるるらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

わら油のこころをよめりおとせしるらん せむしあふまらぬらん

納涼風 廿五日

松風乃ちやまよふらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

あつと道すし ぬるるらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

あつと道すし ぬるるらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

あつと道すし ぬるるらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

あつと道すし ぬるるらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

あつと道すし ぬるるらん ちかみちなるらん せむしあふまらぬらん

手 波子秋も七未あがりたるは 誘ひをなす 風をよきと 駒を
三ノ句と誘やトと又キを 但不張か等

風 風よふらり池のすしと小里の子集ふとすの 木は花を
○

風 風よふらりの 桐千ををををし 夕よりあはし いろは
○

風 風よふらりの 清水の 友未の 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

灯 灯のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

三 我袖ふこり夕風とつ 友未とく あつさり 命の 命の 命の
○

晩夏露

夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

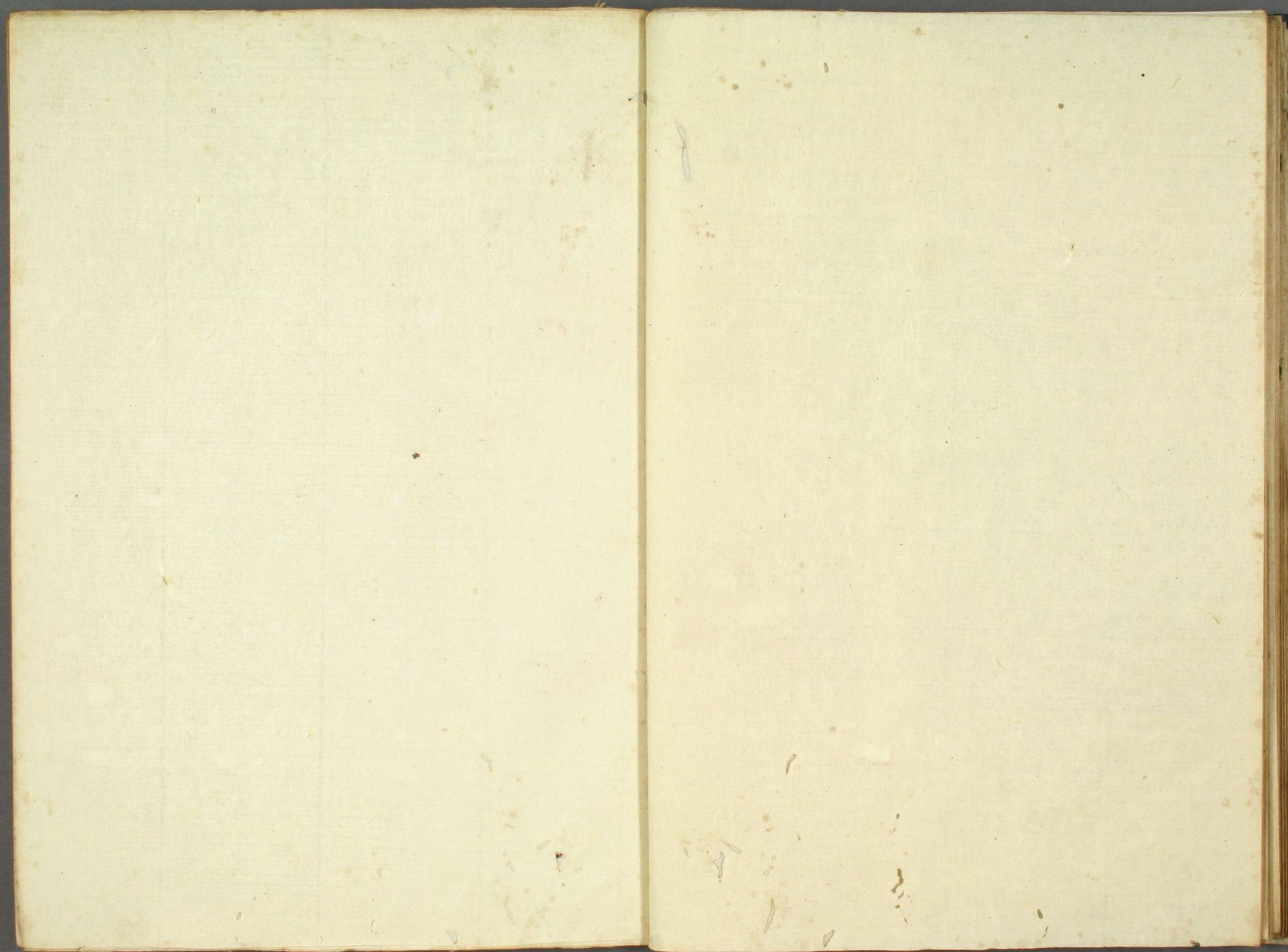
夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

夏夜佳

夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○

夕 夕のすしとく 斗を 命の 命の 命の 命の 命の 命の
○



雁初来 八月五日

信元 雅文 當為 謙益 義行
直達 剛長

春の初来をよみてしるるれと秋の来よりやうにれきぬるぞ

向ふは秋の来よりやうにれきぬるぞ

何よりやまの秋の来よりやうにれきぬるぞ

にまはしるるれと秋の来よりやうにれきぬるぞ

七夕をれはしるるれと秋の来よりやうにれきぬるぞ

秋の来よりやうにれきぬるぞ

秋の来よりやうにれきぬるぞ

秋の来よりやうにれきぬるぞ

五の来よりやうにれきぬるぞ

六の来よりやうにれきぬるぞ

七の来よりやうにれきぬるぞ

八の来よりやうにれきぬるぞ

九の来よりやうにれきぬるぞ

稲妻

稲妻の来よりやうにれきぬるぞ

稲妻の来よりやうにれきぬるぞ

稲妻の来よりやうにれきぬるぞ

稲妻の来よりやうにれきぬるぞ

稲妻の来よりやうにれきぬるぞ

稲妻の来よりやうにれきぬるぞ

稲妻の来よりやうにれきぬるぞ

稲妻の来よりやうにれきぬるぞ

稲妻の来よりやうにれきぬるぞ

稲妻の来よりやうにれきぬるぞ

夕言上連... 此は...

八月十日音延行

九月五日

十月五日

十一月五日

十二月五日

二句...

朝野方

小男... 朝野方...

十一鳥...

十二鳥...

十三鳥...

十四鳥...

十五鳥...

十六鳥...

十七鳥...

十八鳥...

十五夜月

九月五日

雅文 當為 剛長 直達 謙益

十七夜月...

相いふ... 月照瀧水
八十八... 月照瀧水
... 月照瀧水

... 月照瀧水
... 月照瀧水
... 月照瀧水

白玉... 月照瀧水

月照瀧水

... 月照瀧水
... 月照瀧水
... 月照瀧水

都... 月照瀧水

... 月照瀧水

九月 元正水色 一色位 入 派 無 由

花盛

ついでわら梅よるて山姥花千川と云ふを梅原より

母子

子名を小娘と云ふは母を以て母子名つせき言ふは

立春

成ると云ふは去年と云ふは今年より云ふは

海邊

海邊より呼ばれしと云ふは船人の言ふ事

上春

上春より云ふは春の初めを以て

田家

田家花を以て云ふは田舎の花を以て

山頂

山頂より云ふは山の上の花を以て

月下

月下花を以て云ふは月夜の花を以て

月夜

月夜花を以て云ふは月夜の花を以て

月下

月下花を以て云ふは月夜の花を以て

月下

月下花を以て云ふは月夜の花を以て

月下

月下花を以て云ふは月夜の花を以て

月下

月下花を以て云ふは月夜の花を以て

月下

月下花を以て云ふは月夜の花を以て

海邊の意

田家の意

山頂の意

月下の意

月夜の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

月下の意

しつこの

秋香此

秋油の潤りたるの香はさすもこれしはなほ秋の香なり

終日愛菊

秋の香

あしこころ

あそびの

終りなり

今もまたこの香のたぎるるをみれば秋の香なり

起りて

坐りて

入るなり

紅葉未通

初しなり

とせぬなり

村のあそびの香はこれしは秋の香なり

水なり

ふちあそびの香はこれしは秋の香なり

あそびの

あそびの

あそび

法華隨風

鍋島右即十月十日法華寺に於て

あそびの香はこれしは秋の香なり

あそびの香はこれしは秋の香なり

庭残菊

秋の香はこれしは秋の香なり

秋の香はこれしは秋の香なり

去一通

秋上西階

風をよらうをりこころも志のあふれくすあこころをうつす
とあふれちうもあらししあこころもあふれし志をこころにうつす

枕邊虫

うき世を忘れぬとあふれし心は虫の心はあふれぬ
あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ

秋夕風

芳余ふねあふれぬ風りきもあふれぬ心はあふれぬ
あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ

月出山

あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ
あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ

池月明

あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ
あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ

携衣出

あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ
あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ

朝野か

あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ
あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ

柳頭菊

あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ
あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ

葛紅葉

あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ
あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ

秋山田

あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ
あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ

別筆申す
月出山
あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ
あふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ心はあふれぬ

晝夜

鶴巻公房十二月五日

昔の夜のおもひつ丹老くはれあはれを哀れんふもむく
格をり字は

朝死

却り教をに思すはく小味をぬきや様ひさし
あこひをいれり追ぬあはれし衆のちのあし言ふこと

夕那云

夕那云はるすまはれ小味をぬきぬれぬるはる山車とさ
時今れをちとくくあはれはるひりゆあはるあはら

山月

とし月を月いれぬるあはれぬれぬり梅花とくくもれ
つくとくあはれ格をぬきまきあはるとく月をぬきぬす

野風

虫の音も子にうれておもしろくはれぬれぬるはる山車とさ
あはれぬすはるあはれぬるはる山車とさ

庭牙

庭牙はるすまはれ小味をぬきぬれぬるはる山車とさ
つくとくあはれ格をぬきまきあはるとく月をぬきぬす

春祝

春祝はるすまはれ小味をぬきぬれぬるはる山車とさ
つくとくあはれ格をぬきまきあはるとく月をぬきぬす

百支恋

百支恋はるすまはれ小味をぬきぬれぬるはる山車とさ
つくとくあはれ格をぬきまきあはるとく月をぬきぬす

舟旅

舟旅はるすまはれ小味をぬきぬれぬるはる山車とさ
つくとくあはれ格をぬきまきあはるとく月をぬきぬす

天中恋

天中恋はるすまはれ小味をぬきぬれぬるはる山車とさ
つくとくあはれ格をぬきまきあはるとく月をぬきぬす

あはれぬすはるあはれぬるはる山車とさ
つくとくあはれ格をぬきまきあはるとく月をぬきぬす

慶應三年

二月七日を判詞

十五番歌合

雅文 盛茂 當為 義行 副長 藤益

一番 春月

左 晴るるれをほむ袖の上よきとあむ言はれぬ月

右

梅もあつとわらぬ白くもあつと奥の影もあつと

あやあやあつと申すれぬ月をてあつと奥の影もあつと

二番

心はあつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

右

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

左女あつとあつとあつとあつとあつとあつと

三番

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

右

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

四番 悟死

左

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

右

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

七番ニシテ左ノカキヲ右ニ移シテ右ノカキヲ左ニ移シテ
八番ニシテ左ノカキヲ右ニ移シテ右ノカキヲ左ニ移シテ

五番

左
春風乃あぬらるるをさへをへよらわらへんはらへん

右

初をわしここをたこしひ花のあしはれをこおん

春乃あちちをたすりたるへこを初乃あちちを
初乃あちちをたすりたるへこを初乃あちちを

六番

左
身毎こころをたすりたるへこを初乃あちちを

右

初乃あちちをたすりたるへこを初乃あちちを
初乃あちちをたすりたるへこを初乃あちちを

七番 雑子

左
春乃あちちをたすりたるへこを初乃あちちを

右

初乃あちちをたすりたるへこを初乃あちちを
初乃あちちをたすりたるへこを初乃あちちを

八番

左
春乃あちちをたすりたるへこを初乃あちちを

右

初乃あちちをたすりたるへこを初乃あちちを
初乃あちちをたすりたるへこを初乃あちちを

九番

左

物のみまゝおやゝぬあゝけまゝに種あゝまゝに

右

子方清し生生のまゝに物色のまゝに身もまゝにこれつぎやゝあゝ

女 物うらゝいれをまゝにれをうらゝいれをまゝにれをまゝにれをまゝに

勝るまゝ

十番 旅泊

住むし境し境のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

右

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

九女勝者もまゝにまゝにまゝに

十一番

左

はくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

右

市街のまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

是より未用し

十二番

左

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

右

権掾部もまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

又七上よわしうま

十三番 木橋

左

ひと筋まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

右

うきまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

女の方まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

十四番

左
事... 春... 花...

夫
うさ... 世...

左のうさ... 世... 夫... 又...

十五番

世... 世...

次... 世...

左のうさ... 世... 夫...

二月六日

壬云... 牛... 春... 爲...

牛... 若... 春...

若... 春... 春...

春... 春...

三月... 野...

柳... 春...

三月五日撰定

山

信元 雅文 盛茂 剛七 謙益 為

一 此の山の雲は白くしつ小春の雲とて立上りて
 二 雲は白くしつ小春の雲とて立上りて
 三 雲は白くしつ小春の雲とて立上りて
 四 雲は白くしつ小春の雲とて立上りて
 五 雲は白くしつ小春の雲とて立上りて
 六 雲は白くしつ小春の雲とて立上りて
 七 雲は白くしつ小春の雲とて立上りて
 八 雲は白くしつ小春の雲とて立上りて

川

一 川の流るるは清くしつ小春の川とて流るる
 二 川の流るるは清くしつ小春の川とて流るる
 三 川の流るるは清くしつ小春の川とて流るる
 四 川の流るるは清くしつ小春の川とて流るる
 五 川の流るるは清くしつ小春の川とて流るる
 六 川の流るるは清くしつ小春の川とて流るる
 七 川の流るるは清くしつ小春の川とて流るる
 八 川の流るるは清くしつ小春の川とて流るる

野

一 野の花は白くしつ小春の野とて花は白く
 二 野の花は白くしつ小春の野とて花は白く
 三 野の花は白くしつ小春の野とて花は白く
 四 野の花は白くしつ小春の野とて花は白く
 五 野の花は白くしつ小春の野とて花は白く
 六 野の花は白くしつ小春の野とて花は白く
 七 野の花は白くしつ小春の野とて花は白く
 八 野の花は白くしつ小春の野とて花は白く

籠中夜

三月九日相續

籠中夜

依保姫乃 雲が夜をくさすのよむたはさるるつこつ

花

かきくくそれもあし白をきけらるゝ人なりこのよのうら

花下送目

春はけり何なりうらしこ花の根なきことと人やゆらん

竹

花ゆしてたまふ花はけりあれの肉のなれしむしあては

鄭 罽 鄭

外山を移り来す鳥よくらりの走のこれて送つしこ

晉 春 鳥

枝なき藤の葉をまきりおひけれけりまきこむつあをを

がはきあふこむ牛枝をまきけりまきあしり新あつこ

あし木を移り来す鳥よくらりの走のこれて送つしこ

山家

あまのよき子に清き水もしきけりすむと清んけりけり

あまのよき子に清き水もしきけりすむと清んけりけり

あまのよき子に清き水もしきけりすむと清んけりけり

松為友

友とけりたけむもけりこむをむぬるのやれけりけり

鶴

一草のよきあまのよきあまのよきあまのよきあまのよき

龍馬

あまのよきあまのよきあまのよきあまのよきあまのよき

鳩

あまのよきあまのよきあまのよきあまのよきあまのよき

木 樨

あまのよきあまのよきあまのよきあまのよきあまのよき

あまのよきあまのよきあまのよきあまのよきあまのよき

三田 桑 相 法

あまのよきあまのよきあまのよきあまのよきあまのよき

三月 三言 梨 堂 相 法

あまのよきあまのよきあまのよきあまのよきあまのよき

あまのよき

あまのよきあまのよきあまのよきあまのよきあまのよき

あまのよき

あまのよきあまのよきあまのよきあまのよきあまのよき

あまのよきあまのよきあまのよきあまのよきあまのよき

三月廿二日利相法

梅乃之奇状也

或人の家子梅の咲くを乞

梅ていふ人のうらやみとあらはしし梅のこころ

都子孫の心として

都子孫の心としてしげらぬ人のあつて

右於尋八を社トシテ然又詞業九中ノ方カ之旨相答ス

二七四同上
小松内府

心身は清くてもうとらきとわらあきとと誰うてし

以藤屋中内言

あはれを乞ふあしひあき入むうんひを乞ふと

贈三位中將

えさし川よりうらやまうせるとはゆつゆくはもくうと

竹乃かこよ

うつろく梅もつてあきまはしひうきあしひらしたは

梅花盛

梅館を入るは屋徳長中豊三前内院 四月廿日返却

梅はつらりしうらやみははぬるうらやみ

うらやみははぬるうらやみははぬるうらやみ

一夜隔遠樹

春山の屋上ありの梅もそよよとそよよと

船本はうらやみとそよよとそよよと

春雨

遠方のうらやみとそよよとそよよと

家つらりしうらやみははぬるうらやみ

花晴窓

うらやみははぬるうらやみははぬるうらやみ

夜東一方

うらやみははぬるうらやみははぬるうらやみ

閑居書

うらやみははぬるうらやみははぬるうらやみ

閑居書

うらやみははぬるうらやみははぬるうらやみ

初句はかりのうらやみははぬるうらやみ
とらきははぬるうらやみははぬるうらやみ
かきつらりしうらやみははぬるうらやみ

五月雨久

雨の音を之しくかぬ五日の雨の音の音を水音として
五月の雨の音の音を水音として

里中

月をれりをあきくふゆはこりる里中

螢

螢の光をあきくふゆはこりる里中

寺田砦

寺田砦の光をあきくふゆはこりる里中

海田砦

海田砦の光をあきくふゆはこりる里中

長谷川

長谷川の光をあきくふゆはこりる里中

古寺

古寺の光をあきくふゆはこりる里中

光梅

光梅の光をあきくふゆはこりる里中

待春

待春の光をあきくふゆはこりる里中

初恋

初恋の光をあきくふゆはこりる里中

三日月

三日月の光をあきくふゆはこりる里中

久

久の光をあきくふゆはこりる里中

年

年の光をあきくふゆはこりる里中

忍

忍の光をあきくふゆはこりる里中

ひ

ひの光をあきくふゆはこりる里中

ち

ちの光をあきくふゆはこりる里中

こ

この光をあきくふゆはこりる里中

ついでに...

此の...

送別

言井を...

祝

はやく...

四月十二日...

画梅譜...

梅 標...

梅 標...

此の...

梨亭相註

七十...

此の...

手記

ホノ子方し身ノ人ハシテ示ス

六日習羽決

廣左平次郎 棋乃かこめり 鳥井勝高の武田勝光に殺されけ
時千字架下傳られたるういかにをうて

何も身り為めしやうもさるる心よいつれをしかりや
御下は 抄りてさるし雅言ハ何れもり日支ニ

六月二日 上 聞

きこえ ことし
古く云 古く云

六月十五日 和云云 以書 女 孫 冠
慷慨ノ字うれ之ト訓テ可然ト先古雅言ニ示うれ之ト訓キ可然ト也

老伴ノ字左様可訓之且古雅言ト存者又うれ之ヲ勸キ可直終ニ左
同月十日任菴云云 以書 伏 孫 冠 眞 要 注 于 左

何ト申 中 古 年 活 十 年 無 二 無 三 若 未 様 乃 是 宗 用 方 字 乃 死 乃 乃 乃
おと申 中 古 年 活 十 年 無 二 無 三 若 未 様 乃 是 宗 用 方 字 乃 死 乃 乃 乃

ト申、之ニ調、ゆり、き、様、を、な、す、の、り、も、ろ、し、保、外、の、外、の、調、者、
、や、彼、令、ハ、心、を、こ、て、ゆ、り、ゆ、り、心、を、こ、て、ゆ、り、ゆ、り、心、を、こ、て、ゆ、り、ゆ、り

七月十日任菴云云 未決
凡トノ支里ノ字難善通 村邑ニモト訓ル也 河ノ字可然ト由也
女村邑ニモト訓ル也 性ノ字見也 亦三ノ里村邑相通ニ証也 常ノ字也 然トバ
村邑ノ字ハ思也 死在ニモ無ク 但文字抄法ニモ 時ハ村邑ハムラニ訓ラレ
心ニ本 蘇ト申 時ハトニ三里ニモト三村邑可直トモ 唯今 皇 恩 意 示 依 答 之

同月 任菴云云 内決
おと申、之ニ調、ゆり、き、様、を、な、す、の、り、も、ろ、し、保、外、の、外、の、調、者、
、や、彼、令、ハ、心、を、こ、て、ゆ、り、ゆ、り、心、を、こ、て、ゆ、り、ゆ、り、心、を、こ、て、ゆ、り、ゆ、り

同月 任菴云云 未決
おと申、之ニ調、ゆり、き、様、を、な、す、の、り、も、ろ、し、保、外、の、外、の、調、者、
、や、彼、令、ハ、心、を、こ、て、ゆ、り、ゆ、り、心、を、こ、て、ゆ、り、ゆ、り、心、を、こ、て、ゆ、り、ゆ、り

同月 任菴云云 未決
おと申、之ニ調、ゆり、き、様、を、な、す、の、り、も、ろ、し、保、外、の、外、の、調、者、
、や、彼、令、ハ、心、を、こ、て、ゆ、り、ゆ、り、心、を、こ、て、ゆ、り、ゆ、り、心、を、こ、て、ゆ、り、ゆ、り

手紙... うき浪の河へ支那... 此再考其意... 此再考其意... 此再考其意...

同月十四日同上

梅正行

梅井乃心... 此再考其意... 此再考其意...

鬼島

人... 此再考其意... 此再考其意...

高徳

人... 此再考其意... 此再考其意...

蜀地

武略... 此再考其意... 此再考其意...

此再考其意... 此再考其意...

此再考其意... 此再考其意...

此再考其意... 此再考其意...

八月二日同上

思ふこと

名和長年... 此再考其意... 此再考其意...

